2022.03.27　七里教会　　最上光宏

「一つとなるために」　　ヨハネによる福音書 17:6-23

ヨハネによる福音書の 17 章は、その全体がイエスさまの祈りです。ヨハネによる福音書によると、イエスさまは十字架におかかりになる前の夜、最後の晩餐の席で弟子たちの足を洗われ、その後、14 章から 16 章にかけて、長いお別れの説教(「訣別説教」)をされました。その説教が終わってから、イエスさまは天を仰いで祈られたのです。それが、今日の箇所です。

17 章の 1 節を見ると、イエスさまはこの祈りを「父よ、時が来ました」と言う言葉ではじめています。この「時」とは、父なる神さまによって定められた十字架の時です。イエスさまは、この「時」に向かって、これまでの地上での務めを果たしてきましたが、いよいよその時が来たのです。この世を去って、父の御許に帰る時です。イエスさまは、万感の思いを込めて「父よ」と呼びかけて祈られたのです。

このイエスさまの祈りは、内容的に大きく三つの部分から成り立っています。1 節から 5 節までの部分と、6 節から 19 節までの部分と、20 節から最後の 26 節までの部分です。

最初の 1 節から 5 節までの所でイエスさまが祈られたことは、**「あなたの子があなたの栄光を現わすようになるために、子に栄光を与えて下さい」**(1 節)ということでした。これは、イエスさまがこれからお掛りになる十字架の死が、神さまの栄光を現わすものとなりますように、という祈りです。十字架の刑は、重い罪を犯した犯罪人がかけられるローマの処刑です。罪のない神の子イエスにとって、その十字架刑によって、死ななければならないということは、どれほど屈辱的なことであったかわかりません。これまで、神さの御業を忠実に成し遂げて、ひたすら神の栄光を現わすために仕えてきたイエスさまは、十字架の死においてもまた、神さまの栄光を現わし、子としての栄光にあずかることができるように、と祈ったのです。このようなイエスさまご自身の短い祈りに続いて祈られたのが、先ほど司会者に読んで頂いた 6 節以下の記事です。

この 6 節から 19 節までの箇所は、イエスさまのご自分の弟子たちのための祈りです。6 節には、こう記されています。**「世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を表わしました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らはみ言葉を守りました」。**イエスの弟子たちは、イエスさまによって選ばれて、主に従う者とされたわけですが、イエスさまはそれを「父なる神さまが選び出してわたしに与えてくださった人たちだ」と述べています。イエスさまの選びは、父なる神さまの選びでもあります。エレミヤという預言者は、若い時、預言者としての召しを受けた時、神さまから「わたしはあなたを母の胎内に造る前から知っていた。母の胎に生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」と語りかけられ、預言者として立ち上がりました。(エレミヤ 1:5)。神さまは、私たちが生まれる前から、私たち

を必要として、それぞれの歩むべき道を備えていてくださるのです。主イエスの弟子たちも、そのようにして神さまによって選ばれて、イエスさまの弟子として、イエスさまのものとなったのです。　イエスさまが、弟子たちについて、このように父なる神さまが選び、「わたしに与えてくださった」と語られたのには、二つの理由がありました。その一つは、父なる神さまと子なるイエスさまは「一つ」(一体)であり、その思いは同じであるということです。10 節でイエスさまは**「わたしのものはすべてあなた(父なる神)のものであり、あなた(神)のものは、わたしのものです」**と語っているとおりです。父なる神と子なるイエス・キリストは、それぞれ独立した人格でありながら一体であるということを強調しておられるのです。　もう一つの理由は、弟子たちはもともと「あなたのもの」と語ることによって、後に遺される弟子たちのことを神さまに委ね、神さまに守って頂くためです。9 節でイエスさまはこのように祈っています。**「彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々(弟子たち)のためにお願いします。彼らはあなたのものだからです」。**イエスさまは、このように弟子たちを「神さまのもの」と強調することによって、わたしが死んだ後、遺される弟子たちを「あなたのもの」として御手の内に守ってください、と祈られたのです。

11 節でイエスさまはこう祈っています。**「わたしは、もはや世にいません。彼らは世に残りますが、わたしはみ許に参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださったみ名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです」。**
イエスさまにとって、弟子たちをこの世に残して、父の御許に旅立つことは、何よりも気がかりなことでした。イエスさまはこれまでの間、いつも弟子たちと共にいて、み言葉を伝え、彼らを守ってきました。しかし、それでもイスカリオテのユダのように、この世の誘惑に負け、主イエスから離れ、脱落してしまった者もいました。イエスさまはそのことに痛みを覚えつつ、後に遺される弟子たちのことを気遣って、「父よ彼らをお守りください」と祈らざるを得なかったのです。私たちはここに弟子たちを「極みまで愛された」主イエスの深い愛をみる思いがいたします。

イエスさまは 14 章の弟子たちとの別れの言葉(「訣別説教」)の中で、**「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻ってくる。」**(18 節)と言われました。また先週学んだ 16 章では、**「しばらくすると、わたしを見なくなるが、またしばらくするとわたしを見るようになる」**(1 節)と、何度も語られ、弟子たちを慰め励まされました。もうしばらくすれば、十字架にかけられ会えなくなるが、しばらくすれば、甦って再び会えるようになる。また、天に昇った後、聖霊が弟子たちの内に宿り、常に主と共にいることになる、と約束されました。この約束は、このようなイエスさまの深い愛の祈りに裏打ちされていたのです。

イエスさまが、この世に残される弟子たちのことを、これほど気遣い、「彼らをお守りください」と熱心に祈られた背後には、「この世」が、主イエスの弟子たちにとって、必

ずしも生きやすい場ではなく、多くの苦難が予想されたからです。ですから、14 節でイエスさまはこう祈られました。**「わたしは彼ら(弟子たち)にみ言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。わたしがお願いするのは、彼らを世から取り除くことではなく、悪い者から守ってくださることです」**(14-15 節)。　この世は、イエスさまが宣べ伝えた真理のみ言葉を受け入れようとせず、イエスさまを十字架にかけて抹殺しようとしています。主イエスに加えられる危害は、弟子たちにも及ぶ心配があります。この世は、真理を憎み、偽りの平安を求めるからです。この世の闇は主の光に耐えられないのです。そこにこの世に残る弟子たちの苦難があります。しかしイエスさまは、弟子たちをこの世から、どこか別の安全な場所に逃れ去らせてくださいと祈られたのではありません。この世にあって「悪しき者」から守ってください、と祈られるのです。この世から逃避して、自分たちだけの安全地帯に留まるのではなく、むしろこの世の様々な矛盾の中で、「世の光」「地の塩」として真理を証しし続けることを求め、「彼らを守ってください」と祈られたのです。

イエスさまは、16 章の「別れの説教」の最後にこう言われました。**「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」**(16:33)。

この世で、主イエスに従って生きることには、様々な困難があります。しかし、この世の苦難を背負い闘い抜かれた主は、すでに勝利して、私たちと共におられ、私たちのために祈っておられるのです。私たちはこのイエスさまの祈りに支えられ励まされて、勇気をもって、この世に留まり、世の悪しき力と闘うことが出来るのです。

さらにイエスさまは、18 節でこう祈られました。**「わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです」**。

世にある教会は、神によって世から選び出され、「イエス・キリストのもの」とされた者たちの集まりです。それは、私たちがこの世から遊離した安全な場所で、自分たちだけの平安を得て満足するためではありません。この世に遣わされて、この世に神の愛と真理のみ言葉を宣べ伝え、それを証しするためです。教会はこの世にあって、世に遣わされるために、呼び集められた者の集まりなのです。

イエスさまのお別れの祈りは、このように、その大部分が、弟子たちのための祈りです。それは、私たち教会のための祈りでもあります。主イエス・キリストは、私たちのために、祈りつつご自身を捧げられたのです。

イエスさまの祈りは、この後、20 節以下の最後の段落で、弟子たちによって、将来、主を信じるようになるすべての人々のための祈りになっています。**「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも祈ります」**(20 節)と。

イエスさまのこの長い別れの祈りは、イエスさまご自身のための祈りから、弟子たちのための祈りへと展開され、さらに弟子たちを通して主を信じるようになるすべての人々の

ためにと、祈りの輪が外に向かって大きく広がっているのです。私たちの祈りは、ほとんど自分のことや、せいぜい自分の家族や身近な人たちのことに限られていることが多いのですが、イエスさまの場合、自らの死を目前にした祈りにもかかわらず、自分のことよりも、遺される弟子たちや後の教会のこと、将来、主を信じるようになるであろうこの世の多くの人々のために祈られたのです。そのことからこの祈りは、主イエスの「大祭司の祈り」と呼ばれています。大祭司は、神と人との間に立って、執り成しを祈るからです。私たちもまた、すこしでも他者のために執り成しの祈りを捧げる者でありたいと願います。

さて、この祈りの最後にイエスさまが祈られたことは、世界のすべての人が主にあって「一つとなるように」ということです。21 節に**「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」**とあります。この「一つになるため」という祈りは、次の 22 節 b にも、23 節にも繰り返されています。**「私たちが一つであるあるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つとなるためです」**と。

イエスさまの最後の祈りは、「すべての人が一つになるように」という祈りに集中しているのです。この「一つになる」ということは、お互いの個性や違いを認めないで、力によって一つにさせられるとか、感情的な雰囲気によって一体化するということでもありません。そこには、一人一人の人格や個性が無視され、自由がありません。イエスさまは、「一つになる」という言葉でそのような一体化を願っているのではありません。「わたしたちが一つであるように、すべての人を一つにしてください」と祈るのです。ここでの「わたしたち」とは、父なる神さまと子なるイエスさまとの関係です。天の父なる神と人となられてこの地に来られたみ子イエスは、それぞれの人格を持ち、それぞれの役割を果たしつつ、深く一つに結ばれています。世界のすべての人々が、このようにお互いの違いを認め合いつつ、愛と信頼に結ばれて、「一つになるように」と、祈られたのです。

イエスさまは、この「一つになる」ことを、弟子たちのための祈りの中でも述べています。11 節 b**「聖なる父よ、わたしに与えてくださったみ名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです」。**この世が一つになるためには、まず主イエスの弟子たちが、つまり世にある教会が、一つになる必要があるのです。教会に連なる一人一人が、しっかりとキリストに結ばれ、一つになることによって、私たちはこの世に、神による和解と一致を証しし、平和を生み出していくことが出来るのです。

ロシア軍によるウクライナへの無差別の砲撃や爆撃に心を痛めていますが、十字架の主イエス・キリストもまた心を痛めつつ、和解と平和を求めて世界が一つになることを求め、祈っておられるに違いありません。私たちも、主にあって一つとなって、共に世界の平和のために祈り、主のみ心をこの世に伝えて行く群れでありたいと願います。アーメン